

あとがき

2009年度から取り組みを始めたゲンジボタルの広域調査、全国各地の会員、調査協力者の皆さん方のご支援をいただき、3年目の年度末を迎えました。2年目の時には全国的に集中豪雨が多発し、3年目の昨年は、3月11日の東日本大震災、それに伴う福島第一原発の事故発生と異常な状況が続きました。しかし困難な状況の下でも、全国各地の方々が精力的に標本採集に取り組んでくださいました。そして今年度も九州の宮崎県から中部地方の新潟県、関東では茨城県まで、11地点の標本が集まりました。本当に有り難うございました。心から厚く御礼申し上げます。

標本は、茨城県のは、移入先の解明の為に一部を福井工業大学の草桶秀夫先生の所へ送り、また、今坂さんの形態解析にも使い、残りを保存しました。その他の地域は全て今坂さんの所に送って、成虫の形態解析をしていただきました。今坂さんは現職の研究者ですので、お仕事の後の私的な時間をこの研究に割いていただき、大変なご負担をおかけしました。これまた、にわかにお礼の言葉も見当たりません。本当に有り難うございました。

さて、今坂さんの2回目の解析結果ですが、1回目と同様に解剖と顕微鏡を駆使して細部の計測と統計的な処理をして、素人の私たちにもわかるように丁寧な解説をつけてくださいました。ゲンジボタルについて、遺伝子解析全盛時代に、このような形態解析をしてくださる方は、国内にはほとんどいません。今坂さんだけです。

1回目の解析で指摘された、ゲンジボタルの交尾器の形態に西型、東型固有の変異があるのではないかという点について、今回の解析でほぼ確定的とも言える結果を出してくださいました。遺伝子解析ばかりでなく、交尾器の形態によっても西型、東型の区別ができる事になりました。日本では初めての発見です。

また、この結果からこのところ諸説が出てきて混沌としている、西型、東型の境界線問題についても、今後この結果を用いて調査を進めれば、遺伝子、発光間隔以外の領域からも線引きができる展望が開かれました。現在全国的な問題になっている、西日本からの移入問題の解明にも的確に対応できることが提起されています。

形態についても一つ、西型は、九州から中国・近畿・東海・中部・関東と連続した緩やかなラインが存在することも前回に続いて明確になりました。これも、ゲンジボタルの形態解析の研究としては、今坂さんが初めてです。このことは日本の固有種であるゲンジボタルが日本の何処で生まれたのかの解明に関わる大きな問題かもしれません。

本来ならば、この今坂さんの研究は、私どものような小さな団体の機関誌ではなく、学術誌に掲載されるものですが、この度は今坂さんのご厚意により調査月報39号に掲載させていただきました。従って、後日改めて今坂さんからしかるべき所に正式に発表されるものと思います。発表は予報です。

(文責 小俣)